

一年間のSLを振り返って

社会福祉学部社会福祉学科 2年 白木 将士

活動先：NPO 法人 ベタニアホーム

クラス：村上 徹也 先生

1. SLを通しての自分の成長と気づき

一年間のSL活動を振り返ってみて、良かったと感じた所は『活動をすぐに振り返り記入すること』である。4月の時点では振り返ることの重要性を理解せず、適当にメモを取っていただけであったが、授業や活動を重ねるごとに『振り返る』ということがいかに重要であるかがわかった。それは何故かと言うと、自分が活動を通して気づいた事や学んだ事をいつまでも覚えていれば問題はないが、自身の体験で少し間が空くと忘れてしまう可能性がある。その場合に備えてきちんと振り返り記入しておくことで、報告書を書くときに利用できる。また、その日の活動が終わったあとにすぐ振り返ることで、次の日の活動に前日の反省を生かすことができた。どのようなことかと言うと、利用者の方がどのような性格だったとか、その方の家族構成を元にコミュニケーションを図ったりなど、主に利用者との関わり合いのことである。

私は利用者に対し、コミュニケーションを取ろうと考え積極的に話しかけることを意識していたが、活動の初めの頃は利用者とはどのようにコミュニケーションを取ったらよいかわからず戸惑いながら活動していた。そして、コミュニケーションの取り方を職員の方に質問したり、自分で考えたりして色々な方法を考えた。その方法とは利用者一人一人の特徴や、その人はどんな人なのか、その人のジェノグラムを知り家族構成などを事前に職員の人に聞いて知っておくなどだ。事前に利用者を知り理解しておくことによって家族のことで話を広げることができ、その方が聞かれないことを知ることも重要である。

話し方は、目線を合わせ大きな声でゆっくりハキハキと話すことが伝える上で大切なことだと気付いた。認知症の症状がある方は、同じ会話を繰り返し会話したこと自体も忘れていことがある。その時に注意すべき点は、決して否定をしない事。認知症の症状がある方は、否定されることによって頭の中で混乱してしまう可能性がある。対処の方法は、たとえ同じ内容の会話が繰り返されても最後まで聞きやんわりと「さっきも同じ会話をしたよ」と笑顔で教えることを学んだ。

夏の活動で一番私の成長に繋がったのは、認知症について考えたことである。私が活動させていただいた施設は認知症対応型もあり、認知症とはどのようなものなのか職員の方に質問したり、認知症の利用者と関わったりした。代表的な認知症には、アルツハイマー型認知症・レビー小体型認知症・脳血管性認知症などがあり、利用者の中にそれぞれ一人はいた。認知症の利用者と関わってみて感じたことは、同じアルツハイマー型認知症でも人によって症状が違ふこと、施設に通っているが身の回りの事をすべて職員の方にやって貰う訳ではない事に気がついた。施設の中で実際にあったことを二つ例にあげると、気分が悪くなると突然興奮し暴れてしまうアルツハイマー型認知症の利用者が、包丁を使いゴーヤの輪切りを素早くやっていたことなどである。もう一つは、足が不自由で幻視などが現れているレビー小体型認知症の利用者で、記憶障害があるが若い時にやっていた三つ網

など昔のやり方で素早く動いていたこと。自分でできる事は自分でやり、できない事は職員にやって貰う。こういった残存機能を実際に見て、認知症だからという枠組みを作るのではなく、利用者の個別化が必要である。こういったことに気づいた事で認知症について理解が深まり、活動を開始する前の自分より成長を感じることができた。

2. 活動を通して見えてきた地域活動や社会活動

指定地域密着型サービスについて簡単に説明すると、指定を受けた事業所が、要介護の高齢者や一人暮らしが困難である人を、残存機能に応じて自立した日常生活を営むことができるようにするサービスということである。また、それぞれの利用者の家族の身体的、及び精神的負担の軽減を図る場所でもある。活動の中で地域に働きかけている事はわからなかったが、地域との繋がりを大切にしていることはわかった。NPOとは一つのビジネスというのではなく、地域全体でより良い地域を住民たちで作って行くのが目標なのだ。それこそが、NPOが目指す地域密着型サービスであると学んだ。

私が、将来施設の責任者となり、施設を運営するのであれば、地域の場を中心とした利用者同士の関わり方を深めていけるような施設を目指であろう。なぜかと言うと利用者は毎日同じ気分ではないし、その日その日によって望んでいるものが違う。だがら、毎日同じことを提供するだけでは介護と言えない。介護というものは、機械にプログラムされているロボットを相手にしているのではなく、複雑に感情が絡み合った“人”を相手にするのである。利用者が何を考え、何を求めているのか読み取り、それを提供する事が支援者として大切なのではないかと感じた。今回の活動で職員さんにそれを気づかせてもらった。

3. まとめ

活動の最初の頃は緊張していて、目標でもあった笑顔でいる事が中々できなかった。だが利用者とコミュニケーションを取り、活動を進めていくうちに“楽しい”と感じる事ができ笑顔が増えていった。それが福祉の仕事のやりがいだと気付いた。また、今回の活動は福祉の仕事を知るという意味で私にとって、とても為になった。実際に現場に行き利用者とコミュニケーションを取ったりすることは大学の講義では体験できないし、貴重な物だった。現場を知ることで福祉の仕事のイメージをつかむ事ができ、これからの実習や就職先を決める重要な経験になると思う。

